

魂のふるさと駒場で愛唱された一高の寮歌 朽津耕三

2012年11月25日 駒場祭「寮歌の集い」5号館525教室での講演

丁寧なご紹介を有難うございました。私は終戦1年前の昭和19年4月に16歳で一高に入学し、寮歌に出会いました。そして85歳の今日まで68年半、全人生の80%を寮歌とともに過ごしてきました。一高で受けた授業は、正門を入れて真正面の第一本館をはじめ、銀杏道の両側にあった木造の教室でした。それから70年近くも経って、懐かしい駒場キャンパスの教室でお話をする機会を与えて頂きましたことは、本当に夢のような光栄と感激しております。

この「寮歌の集い」を企画されました学生さんたちからご依頼を頂きました時に、まず「皆さんは私からどんな話を期待しておられるのか」を伺いたいと思ってお尋ねしました。そのお答は、配布資料(最終ページ参照)の「講演の背景」に記された通りです。私はその素晴らしさに感動しました。すべての質問に詳しくお答えしたいのですが時間が限られていますので、大半は別の機会に譲って、今日は寮歌と直接に関係する項目についてご説明します。

学校の授業で出された質問に一口で答えるには、「誰でも知っている事柄と比較して説明する」のが便利です。たとえば「カモシカってどんな動物？」と聞かれたら、「皆さんシカを知っているでしょう？カモシカはここが似ていて、ここが違います」と話すと、簡単に説明できます。

そこで私は、「校歌と寮歌の異同」についてお話ししたいと思えます。私は方々の学校の「校歌」が大好きです。特に甲子園の野球放送で出場校の校歌を聞き、神宮球場での観戦で六大学の校歌を聞くと、その格調の高さに感動します。特に東大の応援歌「ただ一つ」が好きで、「このシーズン中『ただ1勝』でよいから、今日とはとにかく勝ってほしい」と、いつも熱心に応援しています。

<校歌と寮歌の共通点>

校歌と寮歌は、「一同が声を揃えて歌い、先輩たちが築いた栄えある伝統と、心の故郷への熱い思いを共有し、確かめること」がそっくり同じです。「教会で歌われる讃美歌に通じる」とも言えましょう。どこの学校の校歌にも「高邁な建学の理想」と「美しいキャンパスの中で師と友の心が結ばれる『教えの場』を讃えて懐かしむ思い」が漲っています。一高で1950年まで60年にわたって作られ歌われた寮歌にも、「立寮の理想」が一筋に漲っていました。

両者の相違点についてお話しする前に、一高には「校歌というべき寮歌」がいくつもあったことをお伝えしましょう。このお話のすぐ前に森下さんが説明

されましたように、「嗚呼玉杯に花うけて」は、「寮歌」であると同時に、名実ともに「模範的な校歌」です。また、皆さんがこの後で歌うことになっている「春爛漫」という寮歌も、「校歌の一つと違ってよい」と言えましょう。これらの寮歌は、明治時代から昭和の第二次世界大戦ごろまで一般市民にも広く知られ、校歌のように歌われていました。

＜校歌と寮歌の相違点＞

では大きな相違点を、配布資料に従って順次にお話ししましょう。

① まず、歌詞の作者が違います。

ほとんどすべての学校で、校歌あるいは応援歌の作詞者は生徒ではありません。学校から依頼された外部の著名な関係者か、ある時期の校長先生でもありましょう。ところが一高の寮歌は、すべて寮生または若い卒業生の作品で、毎年一度の公募で応募作品から選抜されたものでした。卒業生から贈られた寮歌は「寄贈歌」とよばれました。なお一高は「全寮制」で、健康上の理由で通学を認められたごく少数の生徒を除き、第二次世界大戦の終戦直前まで、全員が寮で起居していました。すなわち、「寮生」と「在校生」は同じ意味でした。

作曲者については、寮生と卒業生のほかに、直接の一高関係者でない音楽家（弘田龍太郎氏など）もありました。また長内端（おさない・ただし）先輩のように、数人の卒業生がかなり多くの著名な寮歌を作曲されました。

② 寮歌は校歌(プラス応援歌)と比べて桁違いに多く作られました。

普通の学校の校歌は、応援歌を含めても両手で数えられる程度でしょう。ところが一高の寮歌は上記のように毎年作られたので、応援歌などを含めて 360 を超え、「毎日一つずつ歌って1年かかる」といわれます。(ただし私は数えたことがありません。) 本郷の弥生ヶ丘で自治寮が始まった明治 23 年 (1890 年) を第 1 回として、一高が昭和 25 年 (1950 年) に閉校となった第 60 回までに、平均して毎年ほぼ 6 件ずつ作られたことになります。

③ 歌詞の内容が、通常の校歌と大きく違います。

上記の外面的な問題と違って、これは極めて重要な相違点です。ほとんどの校歌は、「高邁な建学の理想」を散りばめた「みんなでしっかり頑張ろう」という「威勢のよい歌」です。しかし、寮歌の大半は決して「強がり」ではありません。多感な青年たちが厳しい世相に翻弄され、自分を深く掘り下げ見つめて真剣に悩み苦しみ、その思いを「憂い」、「惑い」、「涙」などのキーワードで、素直にありのままに表現した歌詞が多いのです。

たとえば、皆さんがこの後で歌われる「新墾（にいはり）」という昭和12年の寮歌は、一高が本郷から駒場に移って2年目に作られた「駒場の玉杯」とよばれる珠玉の名作ですが、「昂ぶる誇りと思い」を歌い上げた「玉杯」と対照的に、この歌には「萬巻書（よろづふみ） 索る（さぐる）も空し、永久（とこしへ）の昏迷（まよひ）抱きて」とか「ひたぶるの男の子の苦惱（なやみ）」という、「一見して弱々しい」歌詞が出てきます。

寮歌を一貫して支える根幹は、「知恵とまことと友情」です。これは第36回寮歌「烟り（けぶり）争ふ春霞」の一節で、しばしば引用されます。「知恵」はすぐ後で触れることにして、「まこと」は寮歌の方々に様々な漢字で現れます。多くの一高生は「偽りと、良心に悖る（もとる）業」を許さない潔癖な生き方を好みました。また「友情」は、寮生活すべての根幹をなすものでした。皆さんがこれから歌われる最初の寮歌「仇浪騒ぐ」の中で、「友情の象徴」として寮生たちに深く親しまれた「友の憂ひに吾は泣き、吾が喜びに友は舞ふ」という一節についてのお話があると思います。「友情は寮歌の通奏低音である」とも言われています。（鈴木 皇「一高記念祭寮歌通観」向陵 Vol. 45, No. 2, p. 147.）

<余談>

ここで二三の余談をお許してください。「知恵」を一言で言えば、「想定外の事態に遭遇したとき、個人またはチームがそれに直面し、問題を見事に解決してみせる力」でありましょう。一高時代に、私たちは主として「知恵」を寮生活の中で学び、「知識」は主として教室での学習と寮での自習で学んだと思います。これは西欧（たとえばイギリス）の大学で昔から行われてきた「College 学寮と University 大学での相補的な教養教育」に通じるものかも知れません。一高の寮では、教員の先生方（ほとんどは一高卒業生）が寮内で公的・私的に有志の寮生たちと密接に交流し、寮歌も歌っておられましたが、外国でしばしば実施された一対一の個人指導（チューター）の制度は存在しなかったと思います。

なお、一高での寮内の部屋割りは、様々な運動部員と文化部員が合宿した多数の部屋のほかに、組選（くみせん）部屋（クラスごとに1年生チームのスポーツ対抗試合が行われ、上級生がコーチをする形で一緒に合宿する）と、一般部屋に別れていました。寮歌は多くの部屋で、特に運動部の部屋で毎晩のように歌われ、全寮生の集まりでもしばしば歌われていました。

現代でも学生諸君は、私たちの頃と同様に、多種多様な課外活動、特に合宿で「知恵」を身につけておられるでしょうが、一高の合宿には、現代の学生諸君の合宿と二つの大きな違いがありました。「合宿期間の長さ」が大幅に違うことと、「女人禁制」だったことです。

まず「期間」では、現代の学生さんは、休暇が暫く続くときに数日まとめて

合宿するのが普通でしょう。しかし私たちは、「一年中いつも合宿」をしていたのです。深い友情が生まれるのは当然でした。また「女人禁制」といえば、駒場には摂生室（寮の脇にあった小さい医療室）に一人の男性医師（もと寮生だった卒業生）と女性の看護師さんが一人だけ常駐されました。また食堂に数人の女性が働いていましたが、そのほかには記念祭の日に1年で1日だけ、一般の女性たちが校内に（寮内にも）入構できました。

この事情もあってか、寮歌には「女性」を表すキーワードがほとんど現れません。三高（京都）の有名な寮歌である「琵琶湖周航の歌」には「乙女子のほかない恋」が出てきますが、一高の寮歌には「網引く海女や乙女子の、いそしむ様を君見ずや（水泳部の部歌）」という言葉以外には、ほとんどありません。ただし、いま出席しておられる大勢の寮歌愛好者がお好きな「わがたましひ（魂）のふるさとは」という有名な寮歌（第26回、今日は残念ながら歌いません）に珍しく「恋」という文字が出てきます。さて「誰が誰に恋をした」のでしょうか？（答は、「小鳥」が「高き」を恋いたのです。）

④ 寮歌に現れる主語とキーワード：時代による変遷

本題に戻って、寮歌と校歌の重大な違いの一つは、「一高寮歌の内容は時代を反映して大きく変遷した」ことです。校歌は「建学の志」を一筋に貫き、その学校が存続する限り変わりません。ところが寮歌は、(既に述べましたように)毎年新しく作られたので、その時々を生き抜いた青年たちの心を絶えず敏感に反映して大きく変わりました。その変遷を、歌詞に現れた「主語」と「核心となる言葉」で追って見ましょう。不思議なことに、「明治、大正、昭和」という年号で、はっきりと三つに分かれます。寮歌の回数に換算すると、全60回のうち第23回あたりと第37回あたりがこの年号、したがって寮歌の主語とキーワードが変遷する区切りとなります。

<追記> 寮歌が作られた暦年の知り方

寮歌の回数を知って暦の年を知る方法についてお伝えしましょう。回数から10を引いて頭に19をつけると西暦の年号になります。たとえばプログラム2番目の第27回「若紫」は $27-10+1900 = 1917$ 年 = 大正6年の歌です。

寮歌によく現れる「主語」は、明治時代は「われら」、大正時代は「花鳥風月」、昭和時代は「われ」です。また寮歌が訴えるメッセージの核心となる「キーワード」は、明治時代は「自治」、大正時代は「歓楽（たのしさ）」、昭和時代は「責任（せめ）と使命（つとめ）」です。

一高生の全寮制は、明治23年（1890年）2月に木下廣次校長の英断で「生徒

による自治」が与えられて始まりました。それまで方々の学校の学生寮では、管理者による軍隊式の監督と圧制が普通でしたから、一高が「四綱領」という短い「憲法」に基づき寮生たち自身による自律的管理の体制を作り上げたのは、文字通り画期的な事件でした。皆さんがただいま歌った「嗚呼玉杯に花うけて」に漲る作詞者の矜持と緊張は、設立後12年を経ての成果を踏まえたものでした。この自治寮制が成立した経緯は、たとえば馬場宏明先輩による「大志の系譜」に詳しく記されています。(北泉社、1998)

「威勢に溢れた自治の子われら」が一転して「静かな修道」の状況に変わったのは、明治天皇が崩御されて年号が大正に変わった「諒闇」が契機だったと思います。この時期には全国民が喪に服し、それまで賑やかだった寮からも歌舞音曲がしばらく消えました。これを機に、大正の初期には心に響く美しい寮歌が何曲か作られて、「消耗歌」という名で長年にわたり寮生に親しまれました。そして大正の中・後期の寮歌では、寮生の「肩をいからせた力」は抜けて、概して「向陵の豊かな寮生活を思いきり楽しむ心」が明るく歌われています。第一次世界大戦の直接の影響は、私の知る限り寮歌にほとんど見られません。

「われ個人」に厳しく課せられた「責任と使命」への内省と思索が寮歌に現れるのは、昭和初期(1931年の満州事変前後)からです。寮内でのいわゆる思想問題や、寮外の社会で圧倒的に軍国化に向かう潮流に翻弄されながら、心ある寮生たちは自らの生き方と将来について必死で自身に問いかけ、苦悩し続けて、寮歌にその思いを率直にしたためました。たとえば、先ほどお話ししました昭和12年の「新墾(にいはり)」という寮歌でも、「国民(くにたみ)の重き責任(せめ)負ひ」と歌っています。

学校が1935年9月に本郷から駒場に移転した後、1941年末に大東亜戦争が起こり、兵役、日々の授業を放棄しての勤労働員、日本全土にわたる空襲など混乱の中でも、名歌はいくつも作られ、新入生の私たちも感動し、襟を正して歌い続けました。そして終戦(1945年8月)の直後から閉校(1950年3月)までの大混乱期にも、戦没した寮友たちを沈淪(ほろび)の中で偲び、新しい建設を誓う名歌がいくつも作られ、半世紀を過ぎた今でもよく歌われています。

⑤ 寮歌に見る「時代の変遷」の実例

では、今日の集いでこれから歌われる寮歌を実例としてみましょう。お手元のプログラムでMと書かれた「明治の歌」には、11回(明治34年)の「アムール川」のように、「われら一高健児は兜の緒をしっかりと締めて、自治の本領を表わそう」という勇ましい気概が見られます。

Tと書かれた「大正の歌」では、たとえば「のどかに春の訪れて」「桜真白く咲きいでて」など、「春」と「桜」が冒頭の主語になっています。余談ですが、入寮して間もなく「のどかに春」の明るさに感動して先輩に話したら、「そうだろう。この歌は、4月初めに成績発表を見て『ああよかった。無事に進級できた！』という喜びの歌なんだよ」という返事でした。確かに一高の成績評価は厳しく、進級できなかった「原級生」がクラスに何人か混ざっていました。

Sと書かれた「昭和の歌」は、プログラムの都合で先にお話ししました「新墾」のほかに昭和2年の「散りゆく花」と、終戦後（昭和22年）に、応召して遂に戻らなかった寮友を偲ぶ「青旗の」だけですが、いずれも屈指の名歌です。なお序でに、上記の大戦中（昭和17年）に作られた「運る（めぐる）もの」という素晴らしい寮歌があることを一言ご紹介しておきましょう。私たちは機会あるごとに、この長い寮歌の全曲を歌って、終戦の直前に艦上で戦死されました作詞者の清水健二郎さんを偲んでいます。

では、まだまだお話し足りないことが多々ありますが、時間ですので、ここで終わりに致します。ご清聴を有難うございました。

<司会者からの質問>

一つご質問をします。「背景」の(3)に関して、「友達との交流で友情を特に強く感じられた出来事」は何かありましたか？

<答>

では、卒業する前にしばらく寮の同じ部屋で暮らした小柴昌俊さんとのエピソードについてお話ししましょう。

小柴さんは2002年10月にノーベル物理学賞を受賞されましたが、二月ほど経ったある日に、日本経済新聞の滝潤一さんという方から突然に電話を頂きました。「小柴さんが書かれている『私の履歴書』が、来年2月に1箇月の連載になる予定で、その7日目は一高時代の思い出話になります。その時代についての取材に協力してください」という趣旨でした。そこで、私は多少の資料を滝さんに送りました。

間もなく滝さんからまた連絡があって、「二人で写っている写真があったら貸してください」とのことでした。二人が隣りあって写っている大勢の集合写真が身近で見つかったので、遠路はるばる来て下さった滝さんに「これで良ければ」と言ってその1枚をお渡ししました。

当日になって、日経の朝刊を見てびっくりしました。予想に反して、掲載さ

れていたのは学生服を着た私一人の写真でした。私は手元にそんな写真を持っていなかったし、そもそも写した覚えがありませんでした。しばらく戸惑っているうち、これは私が大学を受験したとき、志願票に貼った受験写真だったことに気がつきました。

私はすぐ滝さんに電話をして「この受験写真を、わざわざ大学まで探しに行かれたのですか？」と尋ねました。その答えは意外にも「いいえ、小柴さんに頂きました」というものでした。ここではじめて私は経緯の全貌を思い出して、言葉を失う思いでした。

当時の大学受験とは、旧制高校を卒業する直前でした。1948年3月のことです。卒業とは、私たち二人が寮の同室で過ごした日々から別れる時でした。彼は私に「おい、写真を記念に交換しよう」と言われたので、私は手元に1枚だけ残っていた受験写真の裏に何かを書いて彼の写真と交換しました。彼から受け取った写真を私はもちろん今でも持っていますが、どこにしまっているか記憶にありません。しかし小柴さんは、60年あまりも前の写真を大切に持っていて下さったのです。

小柴さんと知り合ってから受けた有形・無形の友情は計り知れません。多数の国内・国外の物理学の俊英が、彼の科学者として抜群の資質に加えて彼の人柄を慕って研究に参加し、見事なチームワークで「ニュートリノ天文学の創設」という金字塔を築き上げたのも当然といえましょう。

小柴昌俊「私の履歴書-7」、日本経済新聞、2003年2月7日

付録:

教養学部学生から朽津講師への質問:一高の寮生活と寮歌について

1. 寮歌というものが寮生活においてどのような役割をしていたのでしょうか。また、そもそも寮生活とはどのようなものなのでしょうか。今の駒場とどう違うのでしょうか。

当時の寮の生活がどのようなものであったかを、詠帰会の先輩の方々に断片的に教えて頂いているのですが、時間的に寮生活がいかなるものだったのかを体系的に伺ったことはありません。できたらこの機会にお話しただけたらと思います。

また、その寮生活において寮歌がどのようなものだったのかをお話しただけると、自分たち学生をはじめ、初めて寮歌に接する人たちも、寮歌を理解しやすいのではないかと思います。

2. 寮歌には今の学生には真似できないような、とても高尚な歌詞があったりなどします。それはどのような背景で作られたのでしょうか。当時の駒場（および日本の大学）は、どのような空気だったのでしょうか。

3. 皆さんと寮歌を歌いながら自分も含めて感じていたのですが、とても歌詞が難しかったり、背景に膨大な文献からの引用があったり…など、とても自分たちと同じ世代の学生が作ったと思えないほどハイレベルなものばかりです。 そのような歌は、どのような人たちが作ったのですか。
4. その人たちが所属していた大学（一高）は、やはり今と雰囲気は違うのか、逆に、今も根付いている精神のようなものはあるのか？ということを知りたいです。
5. たびたび出てくる「自治の精神」とは具体的にどのようなものだったのか、いま寮のない自分たちには想像がつかないので、是非お話を伺えたらと思います。

【参考資料】

- ・ 東京大学駒場キャンパス構内の記念碑（「一高ここにありき」・「新墾の碑」など）
- ・ 第一高等学校ホームページ (<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/ICHIKOH/index.html>)
特に「歴史概要」と「寮歌集」を参照。
- ・ 喜多 由浩「旧制高校 真のエリートをつくり方」産経新聞社（2013）。